

第31回 JSCRS学術総会

Alcon®

モーニングセミナー 4・第9回老眼研究会セミナー

日時: 6月26日(日) 8:00 ~ 9:00

会場: Room 4 (さくら)

a Novartis company

Dr. MAEDA & Dr. KUROSAKA

今後の 老眼矯正を考える



多焦点眼内レンズが先進医療として着実に普及してきており、老眼に対する外科的治療に対して関心が集まっていますが、現時点での老眼に対する対応としては依然として眼鏡やコンタクトレンズの処方が主流です。

しかし、これら老視に対する眼鏡やコンタクトレンズのすべてが満足する結果を得られている訳ではなく、老視に対するサージカルな対応を発展させることに加えて、メディカルな方法も今後進歩させる必要があります。

そこで本セミナーでは、塩谷浩先生には遠近両用ソフトコンタクトレンズの現況と課題についてお話頂き、不二門尚先生には、最近注目されている眼鏡であるマイクロドットレンズをご紹介頂くことによって、眼鏡およびコンタクトレンズに焦点をあて、今後の老視矯正について考えてみたいと思います。皆様奮ってご参加下さい。

座長 前田 直之先生
(大阪大学)

略歴

1984年 高知医科大学卒業
1992年 米国ルイジアナ州立大学
眼科リサーチフェロー
1995年 大阪大学眼科学教室助手
1999年 大阪大学眼科学教室講師
2001年 大阪大学大学院
感覚機能形成学助教授
2004年 大阪大学大学院
視覚情報制御学
寄附講座教授

座長 黒坂 大次郎先生
(岩手医大)

略歴

1987年 慶應義塾大学医学部卒業
慶應義塾大学医学部
眼科学教室入局
1990年 国立霞ヶ浦病院眼科医長
1992年 慶應義塾大学助手
1997年 慶應義塾大学専任講師
2005年 岩手医科大学眼科学講座
教授

講演 1

遠近両用ソフトコンタクトレンズ
の現況と課題

演者 塩谷 浩先生
(しおや眼科)



講演 2

マイクロドットレンズと眼精疲労

演者 不二門 尚先生
(大阪大学)



今後の老眼矯正を考える

遠近両用ソフトコンタクトレンズの現況と課題

演者 塩谷 浩先生 (しおや眼科)

略歴

1985年 福島県立医科大学卒業	1991年 医学博士取得
1985年 福島県立医科大学眼科学講座入局	1992年 しおや眼科開業
1990年 福島県立医科大学眼科学講座助手	

日本の人口構成は高齢化が進んでおり、老眼対策を必要とするコンタクトレンズの使用者が多くなっていると考えられる。特に使い捨てソフトコンタクトレンズ(SCL)が普及し始めた20数年前からSCLの装用を開始した若年者が40歳台以上に達しており、遠近両用SCLの処方が増えてくると思われる。しかし2015年の日本でのSCL処方における遠近両用SCLの処方割合は4%であり、日本と同様に高齢化が進んでいる他の先進諸国での処方割合が20~30%台であることと比べ、遠近両用SCLの普及は予想より遅れている。そこで本講演では遠近両用SCLの現況を分析し、遠近両用SCLの普及の遅れの原因と対策について言及する予定である。

マイクロドットレンズと眼精疲労

演者 不二門 尚先生 (大阪大学)

略歴

1982年 大阪大学医学部卒	1998年 大阪大学医学部・ 器官機能形成学教授(眼科兼任)
1983年 Indiana州立大学Research Associates	2001年 大阪大学大学院医学系研究科医用工学講座・ 感覚機能形成学教授(眼科兼任)
1988年 国立大阪病院眼科医員(附属視能訓練学院兼務)	
1992年 大阪大学医学部眼科助手	
1996年 大阪大学医学部眼科講師	

IoT (Internet of Things)の時代を迎え、眼精疲労を軽減する光学的な補装具が求められている。累進多焦点の眼鏡、CLは普及しているが、最近機能的眼鏡レンズの一つとして直径数百ミクロンのドットが蜂の巣の様にレンズ表面にコートされているマイクロドットレンズが開発された。この眼鏡を装用すると、老視期の被験者の多くは近見視標の見え方が改善することを自覚する。このレンズ装用により、アコモドポリレコーダーでは自覚的なピント調節時間の短縮が確認されているが、他覚的な所見については検討されていない。本講演では、両眼波面センサーを用いた他覚的な眼精疲労評価法について説明し、本眼鏡レンズに関するパイロット研究の結果を報告する予定である。